

---

# 初めての恋が終わる時

舞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初めての恋が終わる時

### 【Nコード】

N0026U

### 【作者名】

舞

### 【あらすじ】

この小説は今後更新することはありません。

もし、この話の続きが気になりましたら、「初恋終時・改」をご覧ください。

話の内容はほぼ一緒です。

工藤新一君はある組織に薬を飲まされ、江戸川コナン君の姿になったらしい。そして、灰原哀ちゃんも元は宮野志保という人でその組織のメンバーやったらしい。

アタシがこの事実を知ったのは、工藤君が死んだと聞かされた、あの秋の日だった。

四ヶ月前

平次が「ちょっと東京に行って来る」と言って出掛けて一ヶ月が経とうとしていた。

「服部、何しに行ったんやろなあ？」

「分かん。電話も繋がらんし……。自分が受験生やってこと忘れとるわ絶対！」

平次が東京に行ってから連絡が取れなくなり、和葉は心配で胸が押しつぶされそうだった。

授業中、和葉の携帯が鳴る。

「こら！授業中はマナーモードにしときなさい！」

先生は怒っていたが、和葉はそんなのお構いなしに電話に出た。そ

れが平次専用の着信音だったから。

「もしもし？平次？あんた何やってんの！？」

『和葉………。荷物の用意して東京に來い……。』

「えっ……。？」

和葉が怒ろうとしたら、平次が凄く小さな声で言った。和葉の怒っていた気持ちは一瞬で消えた。平次の声に全く元気がなかったから・

「どしたん？なんかあったん？」

『いいから、東京に來てくれ……。』

「分かった。」

和葉は早退し、急いで準備をして東京に向かった。

東京に着いて言われていた住所にたどり着いた。

「工藤って・・・・・・・・工藤君家？」

ピンポン

「来たか・・・。」

包帯や絆創膏だらけの平次が中から出てきた。

「平次・・・・・・・・。」

想像以上の平次の元気の無さと怪我に和葉は立ち尽くしてしまう。

「平次・・・いけるん？その怪我。」

「怪我なんか治るからどうでもええんや・・・。」

「どうでもって・・・。」

「工藤はもう、帰って来んのやから・・・。」

平次の表情から、言葉の意味が分かり和葉は黙り込んでしまう。

「ちゃんと制服持って来たやろな？」

「う、うん・・・・・・・・。」

やっぱり、そういつとやよね・・・。

【あと、制服持って来いよ。】

昨日の電話で平次が制服を持って来いと言ったのは、工藤君のお葬式があるからや・・・。

和葉は新一の姿に驚く・・・。

コナン君・・・？なんでコナン君なん？

「平次・・・その・・・。」

和葉にはなぜ新一ではなく江戸川コナンがここにいるのか分からなかった。

平次は和葉が何を言おうとしたのかが分かり、話出した。

「コナンは工藤新一やったんや・・・。」

「・・・それってどういうこと？」

平次の話やと、コナン君と哀ちゃんはある組織の薬で体が小さくなった工藤新一君と宮野志保さんやったらしい。そしてその組織を潰そうとしたときに、撃たれて工藤君は亡くなったらしい。平次はオレのせいやって言ってた。アタシにはその場の状況が分からんから、なんで平次が自分を責めてるんか分からなかった。やから何も言つてあげられなかった・・・。

「平次・・・。」

平次は和葉と目を合わせようとしなかった。

そんな平次の傍で和葉が立ち尽くしていると、哀がやって来た。

「貴方、何があつたか知りたいんじゃない？」

「うん・・・。」

哀ちゃんに導かれる方にアタシは付いて行つた。

和葉と哀は誰もいない静かな場所で話をした。

「工藤君は服部君を庇って撃たれたの……。」

「平次を……?」

「そう、服部君が奴らに見つかってね……。撃たれそうになったのを工藤君が庇って……。」

「そうやったんや……。」

「彼、撃たれて直ぐに言ってたわ……。」

【工藤っ!!なんでオレなんか庇うんや!!】

【おめえ……大事にしなきゃ……いけねえもの……ちゃんと守れよ……。】

【工藤!!】

「きつと工藤君、貴方のこと言ってたのよ……。」

「……アタシが電話したからかな……?」

「電話?」

「うん……。この前な、蘭ちゃん家に電話したんやけどコナン君が出てん。」

【ごめんね、和葉ねーちゃん。蘭ねーちゃん今お風呂入っててさ……】

・和葉ねーちゃん？どうしたの？泣いてるの？」

【コナン君……。平次が・「お前の考えとることなんか全然分からんし、知りたいと思わんわ」って……………】

【平次にーちゃんが、そんなこと……………】

【アホやねアタシ……………平次がアタシのこと見て無いんなんか前から分かってたのに……………】

【和葉ねーちゃん……………】

【ごめんな。今日のことは忘れて……………】

「アタシが電話で平次のこと言っただから、平次が死なないようにって……………」

「貴方のせいじゃないわよ。彼は彼の意味で服部君を庇ったの……………」

「うん……………」

誰のせいでも無く、悪いのは撃った黒の組織。でも和葉は泣き崩れる蘭や、自分を責めてる平次を見て、自分があんな電話をしなければと後悔した。

「あの……………黒の組織はどうなったん？」

「警察の力もあつて、崩壊したわ……………」

「そっか……………」

「でも工藤君の死は大きすぎる代償だったけどね……………」

「……………」

蘭ちゃん、平次……………大丈夫かな？アタシには何が出来るだろう……………。



蘭はずっと泣いていた。

新一と最期のお別れをした後も、蘭の涙が止まることは無かった・・。

「和葉ちゃん・・・。新一いなくなっちゃたよ・・・。コナン君も・・・わたし、独りぼっちだよ・・・。」

「蘭ちゃん・・・。」

今は何を言っても違う気がして・・・蘭ちゃんに言える事はアタシには何もなかった・・・。それは平次にも同じだった・・・。

平次と和葉は蘭の家に泊めてもらうことになっていた。蘭は家に帰ると部屋に閉じこもって出てこなかった。

平次は蘭の部屋の前に来ていた。

「ねーちゃん・・・。工藤のことやけど・・・。」

「何？」

「ほんまに悪い・・・オレがあの時」

「謝らないで！・・・謝ったって新一は帰って来ないんだから！・！」

「そうやな・・・。」

和葉は二人の様子を近くで見ていた。

「蘭ちゃん、話があるんやけど・・・。開けてくれん？」

「何？」

ドアの向こうで蘭が小さな声で言った。

「アタシ、コナン君と電話で話したねん……。」

蘭がドアを開けて和葉に中に入るように促した。

和葉は電話の内容を話した。

【きつと平次に「ちゃん後悔してるよ。ほんととは心配なのに強がっちゃって、そんなこと言ったんだよ!】

【なんでコナン君は分かるん?】

【オレも一緒だから……。】

【へ?】

【オレも強がってほんとの気持ち伝えられてないから……。】

「最初は歩美ちゃんのこと言っとるんやと思ってたけど、蘭ちゃんのことやったんやね……。」

「そんな……。和葉ちゃんが服部君のこと言ったから……だから新一は服部君を庇って……。」

「……。」

和葉は電話のことで自分を責めていたから、蘭にそう言われ何も言えなくなった……。

「ねえ、和葉ちゃん……。服部君わたしにちょうだい?」

「えっ………?」

「服部君と付き合ってるわけじゃないんでしょ? だったらわたしに  
ちようだい!」

「そんな………。」

和葉は黙ってしまった。蘭が本気で言っているのか分からないし、  
今の蘭には何を言っても駄目だと思ったから……。

平次はアタシのものやないし、付き合ってるわけやない。でもアタ  
シ、平次が好きやから……蘭ちゃんでも嫌や……。

和葉は蘭の部屋から逃げるように出てきた。部屋から出ると平次が  
いた。でも和葉は平次と目を合わせずにその場を離れた。

アタシ、何も出来ん……。

自分が無力過ぎて嫌になった。

そして大阪に帰る日が来た。その間、蘭は部屋に閉じこもって、  
平次とも話していなかった。

和葉と平次も帰ってくるまで黙っていた。だが大阪に着いた時、平  
次が口を開いた。

「和葉………。」

「何………?」

「オレ、東京に行こうと思う………。」

「……………うん……………」

和葉には東京に行くという意味が直ぐに分かった。

蘭ちゃんのとこに行くんやね……………。

「直ぐには行かれへんけど……………高校卒業したら行く。」

「うん……………」

#### 四か月後

そして平次と過ごす最後の冬はあっという間に過ぎた。

平次は卒業までではなくて、登校日数に足りたら引越すと学校に嘘を吐いていた。卒業証書も一人だけ先に貰い、学園中の誰もが平次の嘘に気付くことはなかった。

平次はずっと蘭と連絡を取っていて、蘭の元気は平次や園子のお蔭で戻りつつあった。戻りつつあると言うよりは、吹っ切れた感じで、新一の存在を忘れてしまっているみたいだった。

それから平次が大阪を離れる日。和葉だけが見送りに来た。

「和葉……………。元気でな？大学生になってもあんま夜出歩いたりするなよ？」

「……………」

「それから」

「平次……………。バイバイ……………」

「おう……………」

和葉はバイバイとだけ言った。

平次の目を見て、精一杯の笑顔で・・・。

平次好きやったよ。ずっとずっと平次だけが大好きでした・・・。

この日、和葉の初恋は終わった。

和葉の言葉の本当の意味を平次が知るのには、二人が再会する五年後の春だった・・・。

東京では平次は東都大学、蘭と園子が帝丹大学に進学した。

蘭は常に平次と過ごしていて、園子だけでなく帝丹の人は皆新一のことを思い出していた。

あんなに新一君のことが好きだったのに……。でも、今新一君のことを蘭に思い出させるときつと蘭は壊れちゃうから……。和葉ちゃんには悪いけど、蘭が幸せになれるならわたしはそれでいいの……。

蘭と平次は傍から見て凄くお似合いだった。

しだいに蘭は平次の事を好きになっていった。

平次もそんな蘭に気持ちを返そうとしていた。自分が和葉に惚れていたとも気付かずに……。

「平次、今度行きたいところがあるんだけど。」

「ええで、明日でも行くか？」

「ありがと 平次優しいから、好きだよ？」

「そうか？オレも蘭が好きやで。」

平次は蘭が好きなんだと思い込んでいた。

蘭もまた、初めから好きだったのは平次だと思い込んでいた。

その思い込みは思い込みでしかない事に二人は気付かなかった。

それから二人は互いを求めるようになった。自分の歩んでいる道が正しいと思う為に……。蘭は平次だけを好きだと思つ為に……。

平次は蘭を守ることが新一の為だと思つ為に・・・。  
そんな間違つた愛は誰が止めることもなく、深い深いところまで墮ちていった・・・。

「平次・・・愛してるよ？」  
「オレも蘭を愛しとる。」

それから月日が流れたある日、園子の家で蘭があるものを見つける。

「園子、この写真に写ってるこの子たち誰？」

それは蘭と平次、和葉、コナンが写っている写真だった。

「それは……新一君と和葉ちゃんよ……」

園子は言うべきか悩んだが、本当のことを言った。

「新一……？しんい……ち！？」

「どうしたの？蘭？」

「ごめん、園子。用事出来ちゃった……」

「用事って？ちよつと蘭！？」

蘭は走ってある場所に向かった。

「平次……服部君！！」

「なんや？蘭？今日は園子と買い物行くて……」

蘭が急いで来たのは、平次の部屋だった。

「わたし……わたし……」

「取り敢えず、中入れ。」

突然泣きながら部屋にやって来た蘭を落ち着かせる。

「どないしたんや？落ち着いたら、ゆつくりでええから言うてみ？」

少し落ち着いたのか蘭がゆつくりと話し出した。

「……………服部君、今までありがとう……………」

「蘭……………」

「もういいの……………。ずっとわたしの傍にいてくれてありがとう……………。でももういいよ？……………和葉ちゃんのところに戻っていいよ……………。わたしは独りじゃないって分かったから、もう一人で生きていけるから……………」

「ねーちゃん……………」

「服部君を縛つてごめんなさい……………。新一とコナン君が居なくなつて、独りぼっちになつちゃつたって思つて、周りが見えなくなつて……………。和葉ちゃんにまでわたしと同じ思いさせちゃつて……………。わたしが辛いんだって思つた。皆辛いのに、わたし、自分のことばかりで……………。ほんとなんて謝つたらいいのか……………。なんてお礼を言えいいのか……………」

「ねーちゃん……………。オレもねーちゃんと居るんが正解やと思つて、義務みたいになつてた……………。ほんまの気持ちに気付かん振りしてた……………」

「ほんとにありがとう、服部君……………」

蘭は笑つた。新一を好きだった時の笑顔で……………。

蘭が新一のことを思い出した時には、もう四度目の冬が来ていた。

「服部君、和葉ちゃんに会いに行かなくていいの？」

「ああ、大学卒業して大阪帰るまではええわ。」

「ちゃんと連絡は取ってるんでしょ？」

「ああ、もちろん……。」

平次は嘘を吐いた。平次が東京に来たあの日以来、和葉とは連絡が取れていない。和葉の携帯の番号もアドレスも変わってしまった。そして、二年くらい前から和葉の実家の電話番号も変わってしまった……。

引っ越しでもしたんやろか？

そして平次も蘭も大学を卒業した。

あの日以来帰ってなかった大阪に帰って来た。

取り敢えず荷物を片付けてから一番に向かったのは、和葉の家……。

ピンポン

「平次君！帰って来たんやね、おかえり。」

「ただいま、おばちゃん。和葉居る？」

「ああ、和葉今出掛けとるんよ……。」

「いつ戻るか分かる？」

「ごめん、あの子何も言わんと出掛けたから・・・いつ戻ってくるか、分からんわ・・・。」

「ほな待たしてもらってもええかな？」

「ごめんよ、今日お客さん来るから・・・。」

「そつか・・・じゃあまた来るわ！」

「ごめんね？またね、平次君。」

次の日も和葉の家に行ったが、和葉の母親が出掛ける直前で中に入ってもらえなかった。

次の日は誰も出なかったので、合鍵を使うことにした。

「あれ？開けへん・・・。鍵変わつとる・・・。」

和葉の家の鍵は変わってしまった・・・。

平次は取り敢えず家に帰ろうとして駅に向かった。

そこで、変わり果てた和葉と再会する。

前から歩いて来る女の子。髪は短くなっていて、おろしていたが和葉だと直ぐに分かった。隣には和葉が一番仲良くしていた小日向舞がいるのが見えた。

舞が和葉に何かを言つて、和葉の傍を離れる。

平次は早く和葉に会いたくて、急いで和葉の元に駆け寄った。

「和葉・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「よかった……。携帯変えたんか？連絡取れんから心配してたんやで？」

「・・・・・・・・。」

和葉は俯いて、返事をしようとしなない。

「おい、和葉。聞いとんか？」

平次が和葉の肩に触れた。

「いやっ・・・・・・・・！」

その途端、和葉が平次の手を振り払った。それから和葉が震えだしたのが分かった。

「和葉？」

平次が顔を覗き込もうとしたら、舞が駆け寄ってきた。

「和葉！いける？向こう行こ。」

舞が来て安心したのか、和葉の震えが止まった。

「小日向？おい、和葉どないしたんや？」

舞は何も言わずに和葉を連れて行つた。

「和葉・・・？」

平次は仕方がないから家に帰ることにした。その間も頭の中は和葉のばかり考えていた。

）  
）  
）  
）  
）

「ほい、服部。」

『もしもし？小日向やけど・・・あんたに話したいことあんねん。』

」

「オレも小日向に聞きたいことあるわ。明日会えるか？」

『うん。じゃあ服部ん家行くから。』

「分かった。」

そして次の日、約束の時間に舞が来た。

「服部が聞きたいことって和葉のことやろ？」

「おう、お前の話も和葉のことなんか？」  
「うん・・・。」

舞は平次のいない四年間にあったことを話した。

「東京行ってから和葉と連絡取れなかったやろ？和葉、服部が行った次の日携帯買い換えてん。」

和葉は平次を忘れる為に携帯を換えて連絡を絶った。平次と連絡を取っているといつまでも忘れられないから。平次は蘭のところに行ってしまったって、もう平次を想うことも出来なくなってしまったから・・・。

それから和葉は元気な振りをしていた。いつも周りに気を使って、明るく振舞っていた。学校でも家でも・・・。  
でも平次を好きだった気持ちはそう簡単には消えなかった。

そして大学生になり、和葉はある男の人と出会う。大学のサークルの一つ上の先輩で、和葉に優しく接してくれた人。その人と居て和葉も次第に平次への気持ちが無くなっていった。そして二人が出会ってから一年半が経とうとしていた時、和葉はその人から告白される。直ぐに和葉がOKし二人は恋人になった。

だが和葉は付きあい出して、自分が好きなのは平次だと改めて気付く。そしてその人に別れてほしいと言った。その人は直ぐに了承して二人は別れた。

それから数日後、和葉の携帯に変な電話が掛かってくるようになる。

それは次第にエスカレートし、メールや電話だけでなく帰り道に後をつけられたり、隠し撮り写真が送られてくるようになった。和葉は父親に相談し、ストーカーは一時期収まっていた。和葉も携帯を換えたり、一人で帰らないように気をつけていた。

「……でもある日な、和葉夜遅くまで飲み会に行つてて、帰り一人やと危ないからつてその人に送ってもらうことになったらしいんやけど……二人きりになったら急に態度が変わつて……公園で和葉に……。」

舞が俯いて話すのを止めた。平次の頭には最悪な事が浮かんでいた。

「……その男に和葉、レイ」

平次が頭に浮かんだ最悪なことを言い掛けたら、舞に泣きそうな顔で睨まれた。

「偶然通り掛かった人が助けてくれて、未遂やった……。」

「……。」

「そいつは直ぐ警察捕まったよ。でも和葉その日以来、男が駄目になった……。」

「和葉、ストーカー始まった時から人を恐がるようになって、でもそれだけは大丈夫で相談とか乗ってもらってみたいで……。でも、そいつがストーカーやって……。」

平次は顔を伏せて聞いていた。

「今は誰かと一緒なら外にも出られるようになってる。やから、服部にお願いがあつて来た。」

「なんや？」

平次は舞の言おうとしていることが分かっていた。

「もう、和葉に関わらんといてほしい。」

「……………」

「お願い……。和葉やつと外に出られるようになったんよ。もう辛いこと思い出してほしくない……。」

舞の悲痛な願いは平次にもよく分かった。でも平次は首を縦には振らなかった。

「……………」

「分かった……。服部がうんって言わんのなら、うちが和葉に会えんようにする。」

「小日向っ！」

帰ろうとした舞を平次が掴んだ。

「触んな・・・！」

「小日向、オレが和葉をもとに戻す！やから和葉に会わせてくれ！」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

舞は何も言わずに平次の家を出てきた。残された平次は和葉のことを考えていた。

どうしたら、昔の和葉に戻るのだろう・・・？

和葉の連絡先もわからないし、会いに行っても会わせてもらえないだろう・・・・・・・・。

でも、時間が掛かっても、和葉を昔の和葉に戻してやる・・・。

「和葉、暫くうちに泊まん？」

「舞ん家に？」

「そう！和葉と話したいこととかいっぱいあるし、うちに泊まりにおいで！」

舞は平次が和葉の家に押しかけてもいけるように、自分の家に泊まらせようとしていた。

「でも……。」

「じゃあ……うちが泊りに来ちゃ駄目かな？」

「……それならええよ。」

「じゃあ決定！明日からお世話になりますっておばちゃんたちに言ってくるな」

舞……平次が帰って来たからアタシの傍に居ってくれるつもりなんかな？そんなに心配せんでも、アタシと平次はもう会うこともないよ……。

和葉は平次が自分に会いたいと思っているなんて、思いもしなかった。

次の日の朝早くから舞は和葉の家に来ていた。その日の夕方、和葉の家に誰かがやって来た。和葉には玄関に近寄らないように言っ、舞が出た。玄関の前に立っていたのは平次だった。

「服部、和葉には関わらんとってほしいって、ちゃんと言ったよな？」

「ああ・・・そやけど、和葉に」

「和葉はあんたの顔なんか見たくないって！」

「・・・・・・・・・・。」

「分かったらさっさと帰って!!」

「舞く？どしたんさつきから大きい声出し・・・・・・・・。」

舞の大きな声が気になって和葉が玄関に来た。

「「和葉・・・・・・・・。」」

「・・・・・・・・なんや平次やったん？」

和葉は笑顔で言っただつたが、声は震えているし、顔も強張っていた。

平次に自分が男が駄目だと思えないように演技したつもりだったが、逆に平次に昨日の舞の話が事実なのだと思わせていた。

「・・・・・・・・オレ、用事思い出したから帰るわ・・・・・・・・。」

舞はまた平次を泣きそうな顔で睨んでいた。でも和葉に悟られないように、明るい演技をした。

「そうかそうか、服部用事あるんか。ほなね」

「おう・・・・・・・・。」

和葉、ほんまに男が恐いんか……。オレに何が出来るだろう？

蘭は大阪に来ていた。和葉に会って、直接謝る為に和葉の家に向かった。

和葉の母親に、頼んで二人きりにしてもらおう。

「ごめんなさい……。和葉ちゃんにはほんとに最低なことしたって思ってる……。ごめんなさいって言葉じゃ全然謝りきれないけど……。」

「それで髪切ったん……？」

蘭は長かった髪をバツサリ切って、ショートヘアにしていた。

「うん。でもこんなことで許してもらおうとは思ってない……。」

でも服部君だけは嫌いにならないで……。お願い……。」

「別に平次のこととは嫌いじゃないよ……。それに平次が蘭ちゃんを選んだんや……。蘭ちゃんが謝ることないよ……。」

和葉は蘭の方を見ないで言った。

「わたしが服部君をちようだいって言ったから……。服部君はわたしのどこに来たの。服部君、ほんとはずっと和葉ちゃんだけが好きだったんだよ……。」

「ごめん、そんなん信じれんわ……。」

「和葉ちゃん……。お願い、服部君を」

「ちよお、あんた誰や？」

舞が仕事から帰って来た。

「毛利蘭です。」

「あんたが蘭ちゃん？……もう和葉に会いに来んとな！」

「舞……。」

「ごめんなさい……。」

「謝らんでええから帰って!!」

蘭は舞に追い返されてしまった。

「舞、アタシ大丈夫やで？」

「嘔吐かんとつてよ……。だったらなんで和葉笑わんの？」

「……。舞も嘔吐してるやん……。ほんまは泣きたいのに泣かんやん……。」

舞はいつも思ってた、どうして和葉なんだろうって……。アイツだったら、うちだったら良かったのに……。なんで和葉はつか傷付かなあかんの……。？なんでうちはこんなにも無力なん……？

和葉もいつも思ってた、舞が泣けないのは自分のせいだと……。いつもアタシを一番に考えてくれてるのに、泣くことすら出来ないようにしてしまっている……。アタシがもっと強くなれたら……。

「舞、泣いてもええよ？今までアタシの方が辛いと思って泣けんかったんやろ？」

「和葉……。なんも出来んでごめんな？」

「舞はいつもアタシのこと考えてくれてるやん。」

和葉は舞の手をとった。二人は久しぶりに涙を流した。

舞と一緒に泣いた。気がつけば、あの日“平次が蘭ちゃんを選んで東京に行った日”以来泣いていなかった。

平次が居なくなつて辛くて、悲しかった。

それから、信頼していた人にあんなことをされて・・・アタシの心は壊れてしまった。涙なんか出なくて、もう何も考えたくなかった。

泣いたつて現実是不変ならないのだから・・・。周りを心配させて、自分も余計に惨めになるだけだから・・・。

だからアタシは泣くのを止めた。泣いて終わるならいくらでも泣くの・・・。

でも過去に戻りたいとは思わない。過去に戻つてもアタシが変わらななきゃと今と同じ未来に進んでしまうから・・・。  
でもこのままは嫌や。もっと強くなりたいよ。

くくくくく

暫くして、電話が鳴っていることに気がついた。

「うちが出るな？」

舞が代わりに出てくれた。

ピンポン

誰かが家に来る。

どうしよ、舞は電話しよるし・・・。

「アタシ、出てくる・・・。」

「和葉、ちよつと待った。」

「大丈夫やつて！」

でも一応先に誰か確認しよう。

ドアの向こうには平次が立っていた。

「平次・・・・・・・・。」

ピンポン

「はい・・・・・・・・。」

「和葉・・・・・・・・あ、えつと・・・・・・・・。」

平次は和葉が出て来てくれるとは思ってなかった。話そうと思って  
いたことが全部飛んで頭が真っ白になる。

「どしたん？」

「えつと・・・・・・・・。」

平次が頭をかこうと手をあげたら、和葉がビクつとなった。

「すまん・・・・。」

平次は手を後ろに回した。

「え・・・・・・・・？」

「小日向から全部聞いたんや・・・和葉の事・・・。」

「そう……。」

和葉は平次に顔を見られたくなくて、俯いた。

「和葉……電話番号教えてくれへんか？」

「へ……。」

平次を見上げる。急に見られて平次の顔が赤くなる。

「和葉の連絡先教えて欲しい。」

「分かった……。ちよつと待つとつて、携帯取つて来る。」

それから平次の番号とアドレスも教えてもらった。

平次が凄く嬉しそうな顔をして、和葉は戸惑った。

「じゃあ今日は帰るわ。」

平次は言いたかったことは何一つ言えなかったけど、和葉の連絡先を聞いて上機嫌だった。

部屋に戻ると、舞はまだ電話をしていた。

「和葉、お客さん誰やった？男ちやうかった？」

「女の人やったよ。なんか押し売りやった。」

舞には嘔吐きなくなっただけ、心配するから平次のことには内緒にした。

その日の夜、平次から電話があった。

『和葉、ねーちゃんのことやけど・・・責めんとってくれな?』

「平次も蘭ちゃんも、おんなじこと言うんやね・・・。」

『ねーちゃんが?』

「うん。やつぱ恋人やもんね・・・。」

『ねーちゃんとは別れた。ちゅーかあれは付き合ってないかな・・・』

「・・・・・・・・・・。」

和葉は何も言わなかった。

『オレはずっと和葉が好きやった。』

「・・・・・・・・・・。」

『和葉もオレのこと好いてくれてたって聞いたで?』

「・・・・・・・・・・。」

『やからオレと付き合』

「何言よるん?・・・平次やん、蘭ちゃん選んで東京行つたん平次やん!!今更、好きとか言われても迷惑や!!」

それだけ言つと和葉は電話を切った。

蘭は追い返された後、平次の元を訪れていた。

「ねーちゃん！？どないしてん、その髪！」

「ちよつとね、気分転換」

蘭は笑いながら短くなつた髪を触つた。

「・・・・・・・・和葉に会いに来たんか？」

「うん。でも和葉ちゃんの親友に追い返されちゃった・・・・・・・・」

「小日向か・・・・・・・・」

「彼女、泣きそうな目でわたしのこと睨んできた。わたしのせいで傷付いてる人が何人いるだろう？ほんとに、わたし・・・・・・・・」

「ねーちゃん・・・・・・・・」

「大丈夫よ。わたしは泣かない。わたしには、泣く権利なんかないんだから・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

平次は蘭のせいだとは思ってないけど、自分を責める蘭に何も言えなかった。

わたし、取り返しのつかないことしちゃったけど、もし神様がわたしを許してくれるなら・・・・和葉ちゃんと服部君を幸せにしてください・・・・・・・・わたしはどんな罰でも受けるから・・・・・・・・だから和葉ちゃんと服部君だけは、お願いします。

二人で泣いた日から和葉の元気が無い事に舞は気付いていた。でも和葉に聞いても疲れとるだけだと言ってほんとのことを言ってくれなかった。

〽 〽 〽 〽

「和葉〽携帯鳴ってんで？」

舞が携帯を見ると、服部平次と表示が出ていた。

なんで服部？和葉、服部にいつ番号教えたんやろ？

「和葉〽電話鳴ってるって！」

和葉は携帯に平次の名前が表示されてるのを見ると、電話を切った。

「出んでいいん？・・・服部やる？」

「うん。ええんよ・・・。」

「そう・・・。」

舞はそれ以上何も言えなかった。和葉はまだ平次を好きかも知れないし、でも男が恐いのは治っていないし・・・。

和葉が一番苦しい思いをしているのに、自分は何も出来なかった。

でもアイツなら・・・アイツなら和葉を救えるかも・・・。

平次のところに舞が来た。

「服部、お願いがあるんやけど・・・。」

「・・・もう和葉に構うなって？」

平次は舞に言われそうなことを先に言った。

「ちゃう、和葉を・・・和葉を笑顔にして・・・？」

「小日向・・・。」

「あんた言つたやん！オレが和葉をもとに戻すって！だったら和葉を笑顔にしてよ！」

「落ち着け、小日向。」

「・・・お願い・・・。うちじゃ駄目なんよ・・・。でも服部なら・・・。」

「オレが和葉に笑顔に戻したる。」

小日向はオレが凄く嫌いなはずや。オレが居らん四年間、和葉を支えてきたんは小日向やから・・・。でも小日向はオレを頼って来た。きっとオレなんかに頼るのは凄く嫌やつたと思う。どんな思いでオレにお願いって言ったやろ・・・。それを思うと胸が痛んだ。

オレのせいで、和葉やねーちゃん、小日向まで傷付けてる・・・。でもオレは自分の気持ちばかりで、和葉と居りたいと思う・・・。こんな我儘、誰も許してくれないだろう・・・。でもオレは誰が邪魔しても、和葉を笑顔にする。



平次は和葉の家に来た。和葉は玄関まで来たが、平次だと分かって開けるのを止めた。でも平次にドアを開けられてしまった。

「平次・・・ごめん。今舞居らんし、帰って・・・。」

和葉は平次と目を合わせようとしなかった。

「和葉・・・お前がオレを嫌いでも、恐くても、オレは和葉が好きだから・・・。」  
「・・・やから迷惑なんよ!」

和葉はドアを閉めた。

なんで・・・なんでドキドキしてるんやろ？アタシ、まだ平次が好きなん？  
そんなはずない・・・それに平次は蘭ちゃんと・・・。

和葉は自分の心に戸惑いを感じていた。

それから和葉は誰かが来ても玄関には近寄らないようにしていた。  
平次からの電話もメールも無視していた。

）  
）  
）  
）  
）

でもそんな時、和葉の家の電話が鳴った。

「舞、出て……。」

「うん。……もしもし？おじさん？……えっ！？分かった。」

「お父ちゃんやった？」

「うん。なんか服部、怪我して病院運ばれたって。」

「えっ……！？」

「和葉、行く？……あっ！うち今から仕事あるんやった。ごめん、もう行かな！」

「ううん。いつてらっしゃい。」

平次が病院に……。大丈夫なんかな？

どうしようって悩むこともなく、家を飛び出していた。

何も考えずに、病院まで急いだ。聞いた平次の病室の扉を開けると大滝と数人の刑事らしき人がいた。この中で和葉の事情を知っているのは、大滝だけ。

「和葉ちゃん・・・へえちゃんは今眠つとるよ。もう直ぐ目え覚ますと思うから、居ったつてくれ。」

「うん・・・。」

「じゃあおれたちは外でおるぞ。」

大滝は他の刑事を外に出してくれた。和葉はベッドの傍に会った椅子を離れたところに置いて、座る。

少しすると、平次が目覚めた。

「・・・・・・和葉・・・？」

「えっと・・・いける？」

「ああ、ちよつと刺されただけやから・・・。それより和葉一人で来たんか？」

「うん。」

【今は誰かと一緒なら外にも出られるようになってる。】

舞の言葉を思い出した。

確か一人は無理やって・・・。オレのこと心配して来てくれたんやるか？

そう思うと自然と顔が緩む。

「一人で恐くなかったか？」

「・・・外に出るん怖いよ？でも、なんでやる？平次が心配で・・・気がついたら、病院に来てた・・・。」

俯いて話していて気付かなかったが、人の気配が近くでして顔を上げると、目の前に平次がいた。

「平次・・・近いよ・・・。」

そう言ったのに、平次はもっと近づいてきた。そして、抱きしめられた・・・。

「いやっ・・・!! 離して!!」

平次を突き飛ばした。和葉が顔を見ると、平次が落ち込んでいるように見えた。

「ごめん・・・。頭では分かっとるんよ。男の人が皆そおいうこととするわけやないって。平次は幼馴染やし、大丈夫なはずなのに・・・。恐くて・・・。どうしたらいいんか分からん。」

「和葉・・・。」

泣き出した和葉の手を、平次は自分の手で包んだ。

「・・・。」

「ちよつとずつでええから、オレに慣れてほしい。」

和葉は小さく頷いた。

「和葉、来てくれてありがとな。」

「ううん。怪我酷くなくて安心した。」

和葉の頭をポンポンと優しく撫でる。

「帰りは小日向に迎えに来てもらえよ?」

「ううん。一人で大丈夫だよ。」

「あかんやろ!!」

言ってから大きな声を出してしまったことに気がついた。和葉は少し怯えた顔をしていた。

「すまん……。でも心配やから、小日向に迎えに来てもらってくれ。」

「……うん……。」

舞は仕事中やったから迎えに来てくれるまで結構時間があって……。

平次と二人きりなのは凄く……。なんて言っんやろ？……。疲れてもた。恐いって気持ちが無いつて言ったら嘘やけど、そんなよりもっと違う感情があつて凄い疲れた。

「……平次。あの……。手え……。」

「あつ！……すまん……。」

平次はずっと包んでいた和葉の手を放した。

平次がずっとアタシに気がかつて、それが分かつて辛くなった。昔みたいに普通にしてくれたええのに……。でもアタシが出来んようにさせてるんよね……。

どうしたらもっと普通に出来るやろ？もっと前みたいに・・・。

初めて、平次と居ることに苦痛を感じた・・・。

「舞、ごめんな？」

和葉は舞に病院まで迎えに来てもらったことを謝った。

「謝らんでええって！……でもびっくりしたなあ。和葉が一人で出て行つてたなんて。」

「なんか、気がついたら病院まで来てて……。」

「服部のこと気がになった？」

「……分かん……。」

和葉は少しだけ悲しそうな顔をした。

「平次に好きやって言われてん。前の……高校生の時のアタシやつたら、凄く凄く嬉しかったと思う。でも今は……よう分からん。」

「じゃあゆつくり考えたらええよ。服部は和葉の事待っててくれるよ、きっと。」

「うん……。」

「和葉、うちは何があつても和葉の味方やからな？」

「ありがとう。」

舞が突然言い出した。

「和葉、今日服部のお見舞い行かへん？」

平次のところに行こうって……。

「えっ……？」

「和葉が嫌やったらいいけど。」

急にどしたんやろ？平次を遠ざけてたのに……。

「……舞、平次となんかあった？」

「なんかってどういう？」

「なんて言うか……舞って平次の事嫌いやったよな？」

「ああ、今でも大嫌いやで？でも……。」

和葉に笑顔になってほしいから……。

「でも、何？」

「内緒……和葉、うちと服部の関係が気になる？」

「なっ……気にならんよ!!」

嘘や。平次と舞のこと気になる……。

でもこの時のアタシは、平次が気になるんやなくて、舞が気になるんやと意地を張っていたのかもしれない……。



「結局来てしもた・・・。」

舞に言われて、病院まで来てしまった。舞は病院までは一緒に来てくれたけど、適当に時間潰してくると言って、行ってしまうし・・・。

平次とは会いたいつて気持ちより、会いたくないって気持ちが大きかった。

「どうしよ・・・。」

病室の前で暫く立ってた。

「でも折角来たのに会わずに帰っちゃうんは駄目やね。」

そう自分に言い聞かせて、和葉は病室に入った。

「平次、いてる・・・？」

「和葉、来てくれたんや。おおきに。」

「・・・別に舞が行こうって言ったから、来ただけや。」

なんでこんな可愛げの無い言い方しか出来んのやる？

「それでも来てくれたから、ありがと。」

平次が嬉しそうな顔で笑うから、和葉はどんな顔をしたらいいか分からなくなった。

「やっぱ帰る……。」

「ちょお待った！……オレと居るとしんどい？  
帰ろうとした和葉を呼び止めた。」

「えっ……？」

「前来てくれた時、和葉辛そうな顔しとったから……。」  
「それは……平次が氣い遣ってるから。」

平次がベッドから降りようとしたら、和葉は逃げるように、ドアに近づいた。

「和葉。近づかんから、触ったりせんから、帰らんとってくれ。」  
「やから……それが嫌なんよ……。」

和葉は泣き出して病室を出て行ってしまった。

平次は泣いて出て行った和葉を追いかけることが出来なかった。

「どうしたらええんや……。」

平次には和葉がなぜ泣いたのか、分からなかった。  
 やっぱりオレと会うのも嫌なんやろか？

コンコン

「和葉、そろそろ帰……服部、和葉は？」

舞が和葉を迎えに来た。

「小日向？和葉に会ってないんか！？」

「うん？会ってないで？」

「和葉、来て直ぐに出て行ってもて……。」

「えっ！？なんで！？」

「分からんけど、泣き出してもて。」

「あんた、和葉泣かせたん！？」

「……。」

平次は舞から目を逸らした。

「……まさか和葉にやらしいことしたんや無いやろな！？」

「アホ！！そんなことするか……。それより和葉に電話してみて

くれ。」

舞が電話をしたら、和葉はもう家に帰っていた。

「じゃあ和葉泣かせた訳を聞かせてもらおうか？」

「・・・和葉に近づかんから、触ったりせんから、帰らんとつてくれ。って言うたら・・・それが嫌なんよって泣き出して・・・。」

「その前は何か言ってた？」

「オレと居る時辛そうな顔しとるって言うたら、オレが氣い遣つてるからつて。」

「うん。分からん・・・。単に服部が嫌なだけやったりして？」

なんとなく舞には和葉の気持ちがあつたけど、平次には誤魔化していた。これは二人の問題だから・・・。

「なんやと!!」

「冗談やつて。たぶん和葉は服部のこと・・・やっぱ調子に乗るから言わんとこ。」

「はあ？なんやそれ？」

「じゃあ和葉家に居るか確かめたいから、帰るわ。」

## 25（前書き）

書くの忘れてたけど、平次は刑事さんです。

先輩の川口さんは東京の人で、新一に雰囲気似ています。

平次が一番慕っている先輩です。

舞が帰った後、平次は一人考えていた。和葉が泣いた訳を・・・。

「触らんって言って、それが嫌なんよって言ったけど・・・。オレに触ってほしいって訳や無いわな・・・。そんな都合良く考えたらあかんわ・・・。それとオレが氣い遣ってるって言ったけど、氣い遣ってるわけや無いんやけどな・・・。じゃあなんで」「服部？さつきから俺がいるの氣付いてないのってわざと？」

声を掛けられて氣付いたが、先輩の川口が来ていた。

「川口さん！？いつから居ったんですか！？」

「触らんって言って・・・あたりから？」

川口は笑いながら言った。

「最初からやなですか！来てたなら声掛けてくださいよ！」

「なんか真剣な顔してぶつぶつ言ってるから、声掛けていいのか分かんなくってさ。・・・で？何を言ってたんだ？彼女となんかあったのか？」

「まだ彼女やないですよ・・・。」

「まだってことは、いずれは彼女になるんだ？」

また川口は意地悪な笑顔で言った。

「オレはそうしたいんですけど・・・向こうは全然・・・。」

「片思いなんだ？」

「はい。今日も泣かせてしまっし・・・。ほんま何やってんやろ・・・。」

・。  
」

「でもその片思いの子はお前に本音で接してくれてるんじゃないか。嫌いだったり、どうでもいい奴の前じゃ泣かないよ。泣くってことは、お前に心を許してるんだよ。」

「そんなんですかね？最近はいつの泣き顔しか見て無い気がして・。  
」

「じゃあお前が笑顔にしてみよう。」

「オレもそうしたいんですけど・・。」

「何弱気になってんだよ？服部らしくねえぞ！！」

「そうですよね。オレ、頑張りますわ！」

平次は川口の言葉でまた前向きになった。

舞は和葉の家に帰って来た。

「和葉、勝手に帰ったら心配するやろ？」

「ごめん……。平次とちよっと……。」

和葉は気まずそうにした。

「うちはええけど。服部が和葉のこと心配してたで？」

「うん……。勝手に泣いてもたし、今度平次に会った時どうしよう……。」

「なんで泣いたか話してみたら？和葉の気持ちを服部に話すん。」

「うん……。」

「そうや！うち、もう和葉の家で居るん止めるわ。」

「なんで？」

「最初は和葉と服部が会わんように居るつもりやったけど、和葉が服部に会いたいみたいやし。」

舞はからかうように笑いながら言った。

「アタシ、別に平次に会いたくなんか……。」

「でもさっき今度平次に会ったらって言うてたで？会いたくなかったら、会わんように出来るやろ？」

「それは……。」

「和葉のことは服部に任せることにしたから。うちの役目はこれでおしまい。」

「別に平次のことは」

ピンポーン

「誰か来たな。もしかして服部やつたりして？」

「そんなわけないやん。平次は病院やから。」

舞に言われて、玄関に行つて驚いた。ほんまに平次が来ていたから・  
・。

「よお……。」

「うん。……病院は？」

「抜けてきた。」

「大丈夫なん？」

「まあ、いけるやる。それよりオレは和葉が泣いた訳の方が気になる。」

「えつと……それは……。」

和葉は俯いて訳を話そうとしない。

「オレが嫌やった？でもお見舞い来てくれたってことは、嫌ではないよな？」

「……アタシに気い遣ってる平次は嫌や……。もっと昔みたいに」

「昔みたいにするんは無理や。」

和葉の言葉を遮って、無理だと言った。和葉は泣き出しそうな顔を平次に向けた。

「なんでなん？」

「和葉が好きやからや。ただの幼馴染みだいには出来ん。」

少し和葉の顔が赤くなった気がした。

「……アタシは……平次のこと……す」

「和葉　うち帰るな？……なんや服部居ったん？」

言い掛けたところで、舞がやって来た。

「居ったわ!! ちょお小日向、こっち来い!」  
「なんやの?」

和葉から聞こえないところに舞を呼んだ。

「今和葉がオレをどう思つとるか言い掛けてたのに! お前来るかな!」

「ワザとに決まつてるやろ? 今の和葉がアンタの事好きな訳ないで?」

「それは・・・そうやけど・・・」

「取り敢えず今は、和葉に嫌われんように頑張れば?」

「お前、オレの事応援してくれるんか?」

「別に・・・アンタの事は認めて無いからな! これは和葉の為やねん・・・」

「小日向は素直やないなあ。」

平次が嬉しそうに笑うから、舞は寒気がした。

「こつち見て笑うな! きしょく悪い・・・」

「平次? 舞? 二人で何話してんの?」

和葉が二人が気になって近寄って来た。

「なんでもないで? じゃあうち帰るし、二人はいつまでも玄関に居らんと中入れば?」

「そうやね・・・じゃあ舞、またね。」

和葉が舞らの名前を呼ぶとき、先に平次を呼んだことを舞は嬉しく

思  
っ  
た。  
。

和葉から少し離れたところに平次は座った。

「なあ？今度二人でどっか行かへん？」

「どっか？」

「うん。まああれや・・・デートや／＼」

平次は少し赤くなつた顔を隠す為に、そつぽを向いた。

「ええよ。何処行くん？」

「和葉の行きたいところ、何処でも連れってたる！」

「じゃあ考えとく。」

それから暫くして平次も退院し、二人は新しく出来たショッピングモールに行くことになった。

今日の天気は晴れ、絶好のデート日和。まあ建物の中だから天気は関係ないのだが・・・。

平次は朝から機嫌が良かった。和葉も上機嫌の平次につられてなのか、今日はいつもより元気だった。

楽しいと時間が過ぎるのがあっという間に感じて、時計を見るともう七時だった。

「そろそろ帰るか？」

「うん。」

外に出ると土砂降りの雨が降っていた。

「うわ・・・めっちゃ雨降つとるやん・・・。」

「傘買おつか？」

「そうやな・・・。」

だが突然の雨のせいで傘は売り切れていた。バスで来た二人は、バス停まで走ることにした。

「ほい。」

平次が手を差し出して、和葉は？を浮かべた。

「お前鈍くさいしな・・・手えつないだるわ／＼」

「・・・ありがとう。」

単に手が繋がったただけの平次の手に、和葉は笑顔で手を重ねた。

和葉がやつと笑ってくれた・・・嬉しくて今直ぐ抱きしめたくなくなったが、逃げられたら困るから我慢した。

取り敢えずバスに乗れて、家の近くまでは帰って来れた。

「問題はここからやな・・・。」

「うん。ここから、全く屋根ないもんね・・・。」

「さつきより雨酷くなつとるし・・・和葉、走れるか？」

「うん。大丈夫やで。」

二人は手を繋いで、雨の中に飛び出した。



何とか和葉の家に着いたが、二人ともびしょ濡れになっていた。和葉のブラウスは透けて、下着が見えてしまっている。オレは見ないようにと、心の中で自分に言い聞かせていた。

「じゃあ直ぐに風呂入って温かくしとけよ？」

「・・・・・・待つて・・・・・・平次も・・・・。」

帰ろうとしたら、和葉が抱きついてきた。

濡れているせいで、密着度が増す。背中に和葉の温もりを感じたが、それはしだいに熱へと変わった。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

和葉の手をほどいて向き合った。

和葉が目を逸らすより先に平次の唇が和葉に重なる。

優しいキスから、激しいキスへ・・・・。オレの強引なキスにも和葉は応えてくれた。

それに気をよくしたオレは、首筋や鎖骨にもキスをした。ブラウスのボタンに手をかける。時々聞こえる和葉の甘い声がオレの理性を飛ばした。

「・・・・・・へえ・・・・じ・・・・」

でもオレに触れていた和葉の手が微かに震えているのが分かった。

和葉の顔を見ると、オレははっとして行為を止めた。

「すまん……。」

謝ることしか出来なくて、でも和葉の顔は見れなかった。

30 (前書き)

29 の和葉視点

家に着いた頃には、二人ともびしょ濡れやった。

「じゃあ直ぐに風呂入って温かくしとけよ？」

「・・・待つて・・・平次も・・・。」

帰ろうとした平次に抱きついた。なんで抱きついてしまったんかは自分でも分からなかった。ただこのまま平次を帰したくなくて・・・。

濡れているからなのか、平次との距離が凄く近く感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

沈黙を破ったのは平次の行動。アタシの手をほどいて、向き合った。目を逸らそうとした時には、もう平次の唇がアタシのに重なっていた。

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・ん・・・・・・・・。」

平次の強引なキスにアタシは何も考えられなくなった。

それから平次が触れるところが熱くなっていくのが分かった。

でも平次なのに、平次がしてくれているのに・・・平次に重なってあの人が見えた。

そしたら、平次と目が合った。目が合った平次は、「すまん・・・」

。「と言ってアタシから目を逸らして行為を止めた。

「なんで・・・？なんで止めるん？・・・蘭ちゃんとはしたのに、アタシとは出来んの？」

「ちがつ・・・。」

「もういいよ・・・。」

アタシは悲しくなって涙が出てきた。

「・・・お前がそんな顔するからやる！！」

でも泣き出したアタシを宥めることもなく、平次は怒鳴った。

「お前がそんな・・・そんな怯えた顔するから・・・。」

「・・・ごめ」

「風呂入って・・・温かくしとけよ・・・。」

謝ろうとしたアタシの言葉を遮ってそう言つと、平次は傘を持たずに出て行ってしまった・・・。

平次の事傷付けた……。アタシが平次を恐がったから……。でも平次が恐かったわけやない、あの人にされたことを思い出してしまったから……。

平次とあの人は違う、分かってるのに……。

外を見ると雨は強くなっていて、止む気配も無かった。

「平次……………」

平次に触れられて熱くなっていた体も直ぐに冷えてしまった。

平次が心配やったけど、追いかける勇氣はアタシにはなくて、言われた通りお風呂に入る事にした。

平次が途中まで外していたブラウスのボタンをはずす。

首のところが赤くなっているのが見えた。平次のつけた痕。

あの人につけられた時は消えるまで気持ち悪くて仕方なかったのに、平次のつけた痕は見るだけでドキドキして苦しかった。

アタシ、また平次のこと好きになってもたん？

平次は雨の中を走らずにとぼとぼ歩いていた。

和葉に触れて熱くなっていた体を、雨が冷ましてくれた。

泣かせた上に怒鳴ってしまうなんて……。ほんま最低や……。

折角今日やっと笑ってくれたのに……。あの時嬉しくて、もっと見たいって思ったのに……。

和葉がキスにこたえてくれて、嬉しくて調子に乗り過ぎた。怯えて当然やる……。

でも止めた時に言った和葉の言葉が頭の中で何度も繰り返された。

【蘭ちゃんとはしたのに、アタシとは出来んの？】

確かにオレは蘭ちゃんと関係をもった。何度も何度も蘭ちゃんがオレを求めるたびに、それに応えてきた。その時はそうするのが正しいことだと思っていた。いや、正しいと思ったただだけかもしれない。蘭ちゃんもオレも間違いに気付こうとしていなかった。でも蘭ちゃんを抱いた後にいつも浮かんでいたのは、なぜか和葉の笑顔だった。それでもオレは和葉への思いに蓋をしていた。蘭ちゃんの、工藤の為だと思って……。

そうして月日が流れ、蘭ちゃんがもついいと言い出した。

蘭ちゃんが間違いに気付いたから・・・。

オレは大阪府警に就職が決まって、帰って来ることになった。

その時は和葉の笑顔に迎えられると思っていた。また昔みたいにオレに笑ってくれると思っていた。でも和葉は笑顔を失っていた。

オレの判断のせいで蘭ちゃんに間違った道を歩ませ、和葉から笑顔を奪ってしまった。

「ほんま、なにやってんねん・・・・。」

今日和葉が笑ってくれて嬉しかったことが思い出せないくらい、平次の心は日が沈んだ空と同じように暗くなっていった。

「ごほごほ……。まさか熱まで出るとはな……。」

「熱出した時に男しか見舞いに来ないなんて寂しい奴だな？服部。」

川口さんはバカにしたように……。いや、バカにして笑った。

「川口さんみたいにあつちもこつちも女に手出してないですから。」

「口は元気じゃねえか？服部？それと、俺は一途だ！俺はな……。俺のことはいいから。昨日例のあの子とデートだったんだろ？なんで熱出すほど雨に打たれてんだよ？彼女は大丈夫なのか？」

「別に……。和葉は家まで送って行っだし、大丈夫やと……。」

「家まで送って傘借りて無いってことは家で何かあったんだ？オレで良ければ話聞くんぜ？」

言おうか躊躇っていたが、平次は話し出した。

「……。オレ、昨日和葉とキスしたんです。そしたら止まらなくなっでもて……。そのまま続けてたら和葉が震えてるのに気がついて……。それで」

「ちよつと待て。お前彼女は自分と付き合っ気が全然ないとか言ってたよな？なんでキスしてんだよ？」

「濡れた服で抱きつかれて、平次も……。なんて言われたらもう我慢出来んですよ。」

「え？いつの間に進展してんだよ。俺は聞いてないぞ！」

「言いませんよ！それに、オレも急に抱きつかれてびっくりしたんです。前は手に触れただけでも嫌がられてましたから……。」

「お前、苦勞してんだな……。それで？」

「顔見たら怯えてたんで止めたんですけど・・・なんで止めるん？  
って泣かれて・・・。それで・・・お前がそんな顔するからって  
怒鳴ってしてもて・・・。」

「なんで怒鳴るんだよ。彼女はお前にして欲しいって言ってるよう  
なもんじゃねえか。」

「でもあんな怯えた目で見られたら、手も出せないですよ・・・。」

「服部・・・。そうだ！俺なんか服部が食べそうなもの買って  
来るよ。」

「いいですよ。薬持って来てくれただけで、十分です。」

「まあまあ、遠慮すんなって！」

川口はこっさり平次の携帯を持って出て行った。

平次の部屋から出た川口は早速持ち出した平次の携帯を使った。

「確か和葉って言ってたよな……。ん？遠山和葉……。？」

和葉の番号を見つけ、発信。

『もしもし？和葉ちゃん？俺、服部の上司の川口です。』

「えっと……。川口さん？平次になんかあったんですか？」

『実はアイツ熱出してさ。和葉ちゃんお見舞いに来てくれない？』

「えっと……。？」

『もう和葉ちゃん家まで迎えに来たから、準備して出て来てくれる？』

「えっ？」

和葉が窓から外を見ると家の前に電話をしている男が立っていた。

『じゃあ待つてるから』

少しすると和葉が出てきた。

「あの……。？」

「川口です。よろしくね。じゃあ服部の家、行こうか。車大丈夫？」

「はい……。？」

川口の車に乗って、平次の部屋に向かった。

「まさか服部の想い人が遠山さんの娘さんだったなんて。」

「あつ、それで家……。」

「そうだよ？電話は服部のから勝手にだけど……。」

平次の部屋に入ると平次は寝ていた。

「じゃあ俺帰るから、あとよろしくね？」

「帰っちゃうんですか？」

「俺いない方がいいでしょ？じゃあね。」

どうしよう……平次の部屋に来てしまった。

平次のおでこに触ると凄く熱かった。

「冷えピタ……。あつた。」

額の汗を拭いて、冷却シートを張る。そしたら平次が目を覚ました。

「……………かず…は……………」

「平次……………えっと、その…川口さんって人が迎えに来てくれて……………」

平次が和葉に手を伸ばした。

「ん？……………葉？」

「ちやう。和葉。」

和葉の腕を引いて、抱き寄せた。和葉が平次に覆いかぶさるかたちになる。

平次が近すぎて、心臓がうるさい。

「ちよっ／＼……………離して。」

「嫌や。離したくない。」

「……………。」

「和葉、オレのこと好きやない？」

「……………好き……………」

好きってたった二文字、口にただけなのに、泣きそうになった。

「オレも……。」

平次に体を起こされて、平次も起きた。ほっとしたのも束の間、今度は平次がアタシに覆いかぶさってきた。

「昨日の続き、していい？」

「平次、熱ある……。」

「人にうつした方が早よ治るから。」

「でも……。」

「オレのこと恐いか？」

和葉は首を横に振った。平次は優しく笑って、キスをした。

平次の身体は熱のせいで凄く熱かった。

「へえじ・・・めつちや・・・あつい・・・。」

「うん。和葉の身体も熱なつとるで。」

頭の中は平次でいっぱい、他のこと考える隙なんかなかった・・・。

「和葉・・・愛してんで・・・。」

それはきつと、平次が何度も好きって、愛してるって言ってくれたから・・・。

昨日は何も言われずにされたから、恐かったこと思い出してしまっ  
たんかも・・・。

「アタシ・・・も、好き・・・。」

アタシが好きって言うのと平次が嬉しそうに笑うから・・・凄く幸せ  
だと思った。

きつとアタシは、ずっと平次が好きやった。

平次にバイバイと言った日も、あの人に好きやと言った日も、あの  
出来事があった日も、平次が帰って来た日も・・・。  
ずっとアタシの中に居った人は平次だけやった。

だからアタシはほんとの意味で、平次にバイバイと言わなくちゃいけない日が来るなんて、思わなかった・・・。

それはあの人が釈放される数年後のことやった。

### 37（前書き）

あの人と再会する数年後の前に、蘭のお話。

新一のお母さんに呼ばれて、新一の家に来た。

「急に呼んじやってごめんね？」

「いえ、何かあったんですか？」

「新ちゃんの部屋をね、片付けてたの。そしたら鍵が掛かって、開かない引き出しがあったの。」

「鍵・・・？」

「うん。だから、気になってこじ開けたの。そうしたら、新一の気持ちが入ってたの。」

「新一の気持ち？」

「中身はこれよ。全部蘭ちゃんとの思い出。あと、これは蘭ちゃんへの手紙。」

渡された封筒を開けてみた。中には手紙が一枚。

「蘭へ

こんな遺書みたいな形で告白なんかしたくないけど、オレの気持ちを書くな。

オレは蘭が好きだ。この世界の誰よりも好きだ。

生きて帰って来れたら、蘭に自分の口で言いたいことがある。

聞いてくれるか？

でももし、帰れなかったら、蘭はオレの事は想わずに、誰かと幸せになってほしい。

オレの願いは、蘭が一番に幸せになることだから。

蘭、愛してます。

新一」

わたしは読み終わると涙が溢れて止まらなかった。

「新一は、蘭ちゃんを誰よりも想ってるのよ。ほんとに自分が蘭ちゃんを幸せにしたかったのね。」

「わたし……わたし……。」

わたし、新一が好きだった。誰よりも、愛してた。

今になってそんなことを思い出すなんて……。

馬鹿だ……。わたしは自分のことばかりで……。

ねえ新一、馬鹿だって言うてよ。またわたしに笑って？

こんなにも大好きだった人を忘れてしまうなんて、取り返しのつかない事をしてしまうなんて……。

それでもわたしは新一の願いを叶えたい。

わたし、幸せになってもいいですか？

アタシは平次が熱を出した次の日から、頑張つて一人で出掛けたりしていた。

男の人とも話せるようになったし、バイトも始めた。

バイトは家の近くのファミレス。店長さんが女性でアタシの事情を察してくれた。

だから初めは少しずつやったけど、昔のアタシに戻りつつあった。

「和葉ちゃん、お客さん来てるよ!」

「はい・・・?」

言われたテーブルにメニューを持っていくと、大好きな人が来ていた。

「よう・・・。」

「平次／＼・・・仕事中?」

「ああ、さっきおつきい事件片付いたから、ちょお時間出来てな。」

「それで、来てくれたんや／＼」

「別に・・・お前がちゃんと働けとうか見に来ただけや・・・  
／＼」

「ありがとう／＼」

平次はたまにお店に来てくれていた。

アタシは嬉しくてにやけてるらしく、直ぐに平次が彼氏だと皆にばれてしまった。

それから、平次にプロポーズされた。

元々平次とは一緒に暮らしてたけど、結婚は願望だけで、まさかプロポーズしてくれるなんて思わなかった。でも凄く嬉しかった。

それから、お互いの両親に挨拶をして、籍を入れるのはアタシの誕生日になった。

何もかもが順調に思えて、幸せの絶頂に居る気がしていた。

あの人と再会するまでは・・・。

今日も普通に働いていた。お客さんの数もいつもと変わらなかった。

その時、アタシはお客さんが帰った後のテーブルを片付けていた。

「「「いらつしやいませ。」」」

お客さんが来たから入口の方を向いた。そしたら、あの人が居た。

ガシャーン

アタシはあの人を見た瞬間に手が震えて、持っていた食器を落としてしまった。

「和葉ちゃん！？大丈夫？」

「ごめんなさい！」

アタシはその場に、あの人から隠れるようにしゃがみ込んだ・・・。

「これ片付けたら、奥で休んでて・・・。」

「はい・・・。」

どうして・・・？あの人が居るん？どうして、お店に？アタシってばれたかな？どうしよう、怖い・・・。

アタシは恐怖で訳が分からなくなった。

ガラスで切ったところを手当てしてもらって、今日は帰るようになんか

れた。

「平次……。」

でも平次には気付かれないようにせな……。

家に帰って来ても、落ち着けなかった。

一人の部屋が恐い。あの時の感じが蘇ってくる……。

誰か助けて……。

「平次……。」

「なんや？」

「へっ？」

あれから何時間たったんやろ？ 気がついたら外も暗くなって、平次が仕事から帰って来てた。

「何驚いてんねん？……ただいま。」

「おかえり……。」

平次が帰って来て……。平次がおったら安心やけど……。

「和葉？どした？元氣無いけど？」

「……今日ちよつとミスして……お皿割つてもた……。」

「怪我わ？」

「ちよつと切ったけど大したことないよ。」

「見せてみ？」

「大丈夫やって……。」

「ええから、見せる。」

「うん……。」

傷口を平次に見せた。

「そんなに深くはないな。よかった。でもあんまり落ち込むなよ？  
誰でも失敗することはあるからな？」

「うん……。ありがとう……。」

「じゃあ今日はオレが飯作るわ。」

「いいよ。アタシがするよ！平次疲れてるやろ？」

「じゃあ二人ですか？」

「うん！」

平次は優しいから、これ以上心配かけれん。

それに、もうあの人に会うこともないやろ……。

もう、大丈夫や……。

翌日、アタシはバイトに向かった。

「和葉ちゃん、怪我は大丈夫？」

「はい。迷惑かけてすみませんでした。」

「ううん。」

もうあの人は来ないって、アタシは安心してた。  
実際にあの人はお店には来なかった。

でも中に入って来なかっただけで、バイトの後、待ち伏せされていた。

「和葉、久しぶり？」

逃げようとしとるのに、足が震えて動けん……。

「見ない間に綺麗になったね？男でも出来た？」

怖い……誰か来て……。

「そんなに怯えなくてもいいのに。」

嫌……触らんとって……。

「男なんかできる訳ないよな？もし出来てたら、おれがしたことその男に話してやるよ。」

なんで・・・そんなこと・・・？

「じゃあ、また来るよ？和葉。」

アタシはその場で動けなくなってしまった。

「和葉ちゃん？どうしたの？」

「店長さん・・・。」

「大丈夫？」

店長さんが家まで送ってくれた。

「和葉ちゃん、明日はバイト休みにしとくから。ゆっくり休みなね？」

「はい・・・。」

平次・・・早く帰って来て・・・。

一人の時間が不安で、恐くて仕方なかった。

くくくくく

誰・・・？まさか、あの人・・・？

恐る恐る携帯を見ると、平次と表示されていた。

「もしもし？」

『和葉か？今日帰れんくなったから・・・。』

「そつか．．．。分かつた．．．。」

『和葉？何かあつた？』

「えっ？何も無いよ．．．。」

『そつか。じゃあまたな。』

平次．．．．平次、帰つて来てよ．．．。

お知らせ。

「初めての恋が終わる時」読んでくださった方、ほんとにどうもありがとうございました。

この小説はここで終わりです。

凄く中途半端でごめんなさい。

もし、続きが気になりましたら「初恋終時・改」をご覧ください。

「初めての恋が終わる時」と「初恋終時・改」はほとんど全部同じ内容です。

変なところを直したつもりで、書きなおしています。

他の小説も書きなおしていくので、よかったらご覧ください。

ゆっくりになるかもしれませんが、必ず完結させますので、お付き合ってください。

なんでこんなことしてるの？って思いかもしれませんが、ただの気まぐれです。

ですが、今度はちゃんと完結させます。

200文字って結構書くの大変ですね・・・（・・；）  
もうそろそろかな？・・・（・・）

でわ、今まで読んでくれた方、ありがとうございました。そして、ごめんなさいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0026u/>

---

初めての恋が終わる時

2011年11月27日18時45分発行